

理学療法学科における大学生生活不安感の経時的変化と学年間比較

¹佐野徳雄 ¹廣瀬 昇 ¹跡見友章 ¹西條富美代 ²塚田絵里子
¹安齋久美子 ¹田中和哉 ¹相原正博 ¹平賀 篤 ¹中山彰博

¹帝京科学大学 医療科学部 理学療法学科

²帝京科学大学 医療科学部 東京理学療法学科

Temporal Changes in and between the School Years for Anxiety with Campus Life of a Department of Physical Therapy

¹Norio SANO ¹Noboru HIROSE ¹Tomoaki ATOMI ¹Fumiyo SAIJO
²Eriko TSUKADA ¹Kumiko ANZAI ¹Kazuya TANAKA ¹Masahiro AIHARA
¹Atsushi HIRAGA ¹Akihiro NAKAYAMA

¹Department of Physical Therapy, Faculty of Medical Sciences, Teikyo University of Science

²Department of Tokyo Physical Therapy, Faculty of Medical Sciences, Teikyo University of Science

[Purpose] The purpose of this study was to provide assistance to the student support services of this academic department. A survey was conducted to investigate the concerns of students about college life, the changes in these concerns over time, and the differences among students from different school years.

[Subjects] The survey included a total of 219 first- to third-year students enrolled at departments of physical therapy in 4-year universities.

[Methods] The evaluation items with regard to student concerns about college life were rated a total of three times: in June, August, and November.

[Result] The analysis of the overall changes over time in student concerns about college life revealed no significant differences in the evaluation items between first- and second-year students. In third-year students, the item “concerns about assessment” was rated significantly higher in August than in June. The item “failure to adapt to college life” was rated significantly lower in June than in August and November. The total score was significantly higher in August than in June and November. A comparison among students from different school years revealed no significant differences in any evaluation items.

[Conclusion] Anxiety was stronger in the surveyed population than in students in general universities, and this tendency was also observed for students in the upper school years. The lack of adaptability to college life among first-year students was rated high from the time they entered university. The results of this study demonstrated that the concerns about college life held by second- and third-year students increased in August.

キーワード：大学生生活不安感、理学療法学科、経時的変化、学年間比較、四年制大学

I. はじめに

18歳人口の低下に伴い、大学全入時代が叫ばれる昨今では、学生の全般的な学力低下や気質の変化が教育、社会問題として取り上げられている。文部科学省が平成24年度に実施した大学、短期大学、高等専門学校を対象にした調査では、全体の2.65%の学生が中途退学しており、平成19年度の調査時に比べて増加傾向にある。このような状況下においても、超高齢化社会に対応すべく理学療法士の養成校は増加の一途を辿っており、入学対象者の間口が広がっている。その結果、教育現場では学力低下、学習意欲や態度の低下、社会的規範意識の乏しさなどを来

した学生が増えており、留年者・休学者・退学者数は増加している¹⁾。

このような中途退学者増加の背景には、大学生生活不適応者の増加が指摘されており、これまで中学生や高校生を中心に見られていた不登校を中心とする、不適応状態が大学生にまで拡大していることが一つの要因として考えられる。大学入学前後の不適応感に関与する因子には、不本意入学と入学後の不本意感がある。不本意入学とは、本人の意に添わない入学のことであり、不適応感につながりやすいとされている。不本意入学には第一志望不合格型、合格の可能性だけを重視して受かる大学に入学した合

格優先型、自分の興味・適性よりも資格取得など就職の有利さを優先した就職優先型、自宅から通学できる・学費が安いなど経済的・地理的事情が優先された家庭の事情型の4つの型があるとされている²⁾。入学後の不本意感についても多様な要因が指摘されており、授業が面白くない、自らの適性に疑問が出た、その学部・学科では自分のやりたいことが出来ないと感じたなど様々である。こうした不本意入学や不本意感は出席放棄につながりやすく、最終的に休学や早期の進路変更を余儀なくされる。また、大学不適応に関する不安が不適応行動出現の指標になるとされており、大学入学直後の学生に対して、不本意入学であるかどうか、大学生活のどこに不満感・違和感を持っているかなどを明らかにすることは、学生の大学生活への満足感を高める方策を探る重要な手段であるとされている³⁾。しかし、これら対象の大学生は、日常生活における不安について多くを話さない傾向にあり、教員からは不安そうに見える大学生も、自身は不安に気づいておらず、気づいていても語らないことが多い。そのため、大学生が学生生活において感じている不安の種類、及び水準を適切かつ迅速に診断できる心理検査として、College Life Anxiety Scale (以下、CLAS) が開発された⁴⁾。

CLASは、大学内のみならず広く大学生活全般における不安の測定を目的として開発され、信頼性と妥当性に関してはManifest Anxiety Scaleや青年版TAIと連関妥当性がある検査である。国立大学5校、私立大学5校に通う大学1年生から4年生の計2782名を対象とした調査では、学年が上がるにつれて不安感は下がるなど、一定の傾向が示されている⁴⁾。しかし、CLASを用いた調査データは一般大学の学生を対象に行われたものが多く、理学療法学科のように専門的な資格取得を目的としたカリキュラムが組まれ、尚且つ臨床実習が含まれる学科の学生を対象とした研究は数が少ないのが現状である。

そこで本研究では、当学科の学生支援の一助にすることを目的に、当学科の学生を対象とした大学生活不安の経時的変化や学年間の相違を調査することとした。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、平成27年度に帝京科学大学医療科学部理学療法学科に在籍中の留年経験のない学生、一年生86名(男性64名、女性22名;調査開始時年齢18.4

±0.5歳)、二年生73名(男性52名、女性21名;調査開始時年齢19.3±0.5歳)、三年生60名(男性45名、女性15名;調査開始時年齢20.4±2.1歳)の計219名(男性161名、女性58名;調査開始時年齢19.5±1.5歳)であった。本研究は、本学の倫理審査委員会で承認を得た後(第15020号)、対象に本研究の目的、内容、回答内容が今後の成績判定に影響しない事、また質問紙の提出をもって研究に同意したと判断する事を書面と口頭にて十分に説明し、実施した。

2. 方法

CLASは各学年に集合調査法で計3回実施した。実施時期は、新学期開始から2か月後の6月、前期試験終了直後の8月、三年生の評価実習直前の11月とした。

CLASは、大学生活における不安の傾向を測定できる大学生活不安尺度であり、「日常生活不安」、「評価不安」、「大学不適応」の3つの下位尺度、計30設問から構成されている。「日常生活不安」は、14の設問からなる大学の日常生活に対する不安感の尺度であり、「評価不安」は、11の設問からなる大学における単位や試験に対する不安感の尺度、「大学不適応」は、5の設問からなる不登校や中退といった就学上の問題を生じさせる大学不安感の尺度である。対象はすべての設問に「はい」、「いいえ」の2件法で回答する。不安傾向に該当する回答が「はい」の回答となり、1点となる。この合計点が高いほど不安感が強いことを示している(表1)。本研究では、下位尺度別の点数と総合計点を用いることとした。各学年の6月、8月、11月の結果には郡内比較を行い、実施月ごとの一年生、二年生、三年生の結果には群間比較を行った。

統計学的解析は、各学年の郡内比較にFriedman検定を適用し、主効果が認められた場合にはWilcoxonの符号付き検定を実施しBonferroniの補正を行った。実施月ごとの学年間の比較には、Kruskal Wallis検定を適用した。統計ソフトウェアはJSTAT13.0 for Windowsを使用し、危険率5%未満をもって有意と判断した。

III. 結果

1. 各学年の経時的変化

各学年の経時的変化では、一年生と二年生の各評価項目に有意差は認めなかった。三年生は、評価不安の8月が6月と比較して有意に高値を示した。大学不適応は6月が8月、11月と比較して有意に低値

表1 CLASの質問項目

-
- 1) 大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になります。
 - 2) 授業中に何かしなければならぬとき、へまをするのではないかと不安になることがあります。
 - 3) こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂鬱な気分になることがあります。
 - 4) 4年間で卒業できるかどうか、不安です。
 - 5) 必修科目の成績が「D(不可)」だったらどうしようと心配になることがあります。
 - 6) この大学にいと、何か不安な気持ちになります。
 - 7) 留年したらどうしようと、気になります。
 - 8) テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなります。
 - 9) できることなら、転学あるいは転部したくて仕方がありません。
 - 10) 万が一事故にあったり、病期をしたらどうしようと心配になることがあります。
 - 11) テストを受けていて、わからない問題に出会ったとき、頭の中が真っ白になってしまうことがあります。
 - 12) 入学した学部が自分にあっていないような気がして不安です。
 - 13) 友達と一緒に何かをしなければならぬとき、うまく協力できるか不安な気持ちになります。
 - 14) 成績のことが気になって仕方がありません。
 - 15) 大学を退学したいと思うことがあります。
 - 16) サークルで先輩たちとうまく付き合えるか心配です(サークル未加入の人は入ったと仮定して答える)。
 - 17) 大学の成績のことを考えると、憂鬱です。
 - 18) テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になります。
 - 19) 1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安です。
 - 20) 申請した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配です。
 - 21) 将来、良い会社に就職できるかどうか、不安です(“会社”を“自分の希望先”と読み替えても良い。)
 - 22) 何らかの団体に突然勧誘されないか、不安です。
 - 23) テスト中、緊張して自分の力が発揮できません。
 - 24) 先生に「研究室まで来るように」と呼ばれたら何を言われるかとても気になります。
 - 25) 先生が近くにいと気になって仕方がありません。
 - 26) 授業で発表するとき、声が震えることがあります。
 - 27) 大学の先生と話をするとき、とても緊張します。
 - 28) 1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配です。
 - 29) 卒業論文がうまく書けるかどうか、不安です。
 - 30) 授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがあります。
-

を示し、総合点は8月が6月、11月と比較して有意に高値を示した(表2)。

2. 学年間の比較

学年間の比較では、全ての項目で有意な差は認めなかった(表3)。

IV. 考 察

本研究は、帝京科学大学医療科学部理学療法学科に在籍する一年生から三年生の学生を対象に、大学生活不安尺度であるCLASの各学年の経時的変化と、学年間の差を比較、検討した。その結果、各学

年の経時的変化は、三年生の評価不安、大学不適應、総合点で有意な差を認めた。学年間の比較では、全ての項目で有意な差は認められなかった。

まず、各学年の経時的変化について考察する。一年生は各項目で有意な差が認められなかったが、時間の経過とともに不安が減少する傾向を示した。6月は大学入学から2ヶ月しか経過しておらず、大学生活に慣れていないことが考えられる。藤井は、大学不適應に陥る原因は様々であり、大学の教員や友人関係に対する不安や、学業全般に対する不安も大学不適應を引き起こす原因となると述べている⁵⁾。

表 2 CLAS 下位尺度の得点および総合点の経時的変化

		6月	8月	11月
一年生	日常生活不安	6.62±2.43	6.25±2.65	6.01±3.00
	評価不安	7.11±2.33	6.68±2.51	6.38±3.23
	大学不適應	1.24±1.57	1.06±1.43	1.08±1.47
	総合点	15.00±4.98	14.00±4.76	13.50±6.30
二年生	日常生活不安	6.22±2.84	6.71±2.91	6.60±2.92
	評価不安	6.45±2.96	7.26±2.81	6.89±3.03
	大学不適應	1.26±1.57	1.32±1.67	1.25±1.48
	総合点	14.10±5.74	15.30±5.86	14.70±6.19
三年生	日常生活不安	6.82±2.49	7.18±2.96	7.00±3.36
	評価不安	6.56±2.69	7.55±2.84	6.75±3.03
	大学不適應	1.30±1.52	1.77±1.67	1.55±1.58
	総合点	14.70±5.48	16.50±6.36	15.30±6.92

平均値±標準偏差 * : p<0.05

表 3 CLAS 下位尺度の得点および総合点の学年間の比較

		一年生	二年生	三年生
6月	日常生活不安	6.62±2.43	6.22±2.84	6.82±2.49
	評価不安	7.11±2.33	6.45±2.96	6.56±2.69
	大学不適應	1.24±1.57	1.26±1.57	1.30±1.52
	総合点	15.00±4.98	14.10±5.74	14.70±5.48
8月	日常生活不安	6.25±2.65	6.71±2.91	7.18±2.96
	評価不安	6.68±2.51	7.26±2.81	7.55±2.84
	大学不適應	1.06±1.43	1.32±1.67	1.77±1.67
	総合点	14.00±4.76	15.30±5.86	16.50±6.36
11月	日常生活不安	6.01±3.00	6.60±2.92	7.00±3.36
	評価不安	6.38±3.23	6.89±3.03	6.75±3.03
	大学不適應	1.08±1.47	1.25±1.48	1.55±1.58
	総合点	13.50±6.30	14.70±6.19	15.30±6.92

平均値±標準偏差 * : p<0.05

そのため、時間の経過とともに大学生生活に順応することで、各項目の不安感が減少したものと考えた。一方、大学不適應に関しては、先行研究と異なる結果となった。四年制大学の理学療法学科一年生を対象とした金子らの研究では、大学不適應は一般大学の学生と比較して入学当初には低値を示すが、時間の経過とともに増加したと述べている⁶⁾。理学療法学科に入学する学生は、その殆どが理学療法士の国家資格の取得を目的に入学すると考えられる。しかし、専門的な知識や技術の習得、各学年に合った臨床実習課題が課せられるほか、卒業直前まで国家試験に備えて学習をしなければならないため、大学不適應は入学時から時間の経過とともに増加すると推察される。しかし、当学科の学生は、一般大学の学生と同様に、入学当初に最も高値を示し、時間の経過とともに一定まで減少する結果となった⁵⁾。このような大学入学直後の大学不適應には、第一志望不合格型、合格優先型、就職優先型などの不本意入学が要因となっている可能性があり、入学後早期の聞き取りや、その後のサポートが必要であることが示唆された。

二年生は、全ての項目において有意な差は認めなかったが、8月が最も高値を示した。経時的な変化を認めなかった要因として、入学から既に一年が経過しているため、大学生生活に順応していることが考えられる。各項目で8月に高値を示した理由としては、前期定期試験の終了直後であったことが考えられる。二年生は科目数や試験数が一年時と比較して増えるため、試験による負荷が一年次よりかかり、その結果、8月が高値を示したと考えた。

三年生は、評価不安の8月が6月と比較して有意に高値を示した。大学不適應は6月が8月、11月と比較して有意に低値を示し、総合点は8月が6月、11月と比較して有意に高値を示した。評価不安の8月が6月に比べて高値を示したのは、定期試験終了直後にCLASを実施した事が要因であると考えた。3年生は11月に初めて経験する長期実習が控えているため成績への関心が高まっており、定期試験後の評価不安も増加したと考えた。大学不適應の8月と11月が6月と比較して高値を示したのは、前期定期試験が終了したことで、長期実習に対する感心が高まったためと考えた。三年生の前期科目には、長期実習を見据えた実技試験も行われる他、各教員からも実習に関するオリエンテーションや学習の促しが行われる。その結果、定期試験の結果が出ていない状況で長期実習に対する不安が更に高まり、状況を

整理出来ない学生の大学不適應が増加したと考えた。また、11月は実習地の決定、指導者会議を終えるなど長期実習への準備が進んでいるため、8月と比較して大学不適應は低値を示したと考えた。

次に学年間の比較では、全ての項目で有意な差は認めなかった。一般大学の学生では、学年を重ねるごとに日常生活不安、評価不安、総合点は減少するとされているが⁵⁾、本研究では学年を重ねても変化しない事が示唆された。また、各項目の数値は一年次から一般大学生より高値を示す傾向にあり、それが三年次まで継続している。これは理学療法学科の学生を対象とした先行研究と同様の結果となった⁷⁾。一般大学との違いとして、一つの職種になるための専門的なカリキュラムが組まれていることが要因として挙げられる。職に違和感がある場合に不安感は卒業するまで解消されず、逆に増悪していくと推察される。また、理学療法学科では各学年に合った実習課題が提示されるため、常に一定のストレスに晒されることになる。その結果、学年を重ねても不安感は減少せず、学年間に有意な差を認めなかったと考えた。

本研究では、当学科の学生は一般大学の学生と比較して全ての項目で不安感が強く、上位学年になっても、その傾向は変わらないことや、一年次では入学当初から大学不適應が高く、二、三年次は8月に大学生生活不安が高くなることが明らかとなった。これらの傾向は、同じ四年制大学の理学療法学科と比較しても相違する点が認められた。本研究の限界は、年をまたいだ調査は行っていないため、各学年の特性が結果に影響している可能性がある。今後は同学年を複数年に渡り調査することで、学生が不安を感じる要因について精査し、成績不良などリスクがある学生の早期抽出を行なうことが可能になると考える。

V. 結 語

今回、当学科の学生支援の一助にすることを目的に、大学生生活不安について調査を行った。その結果、一般大学の学生と比較して全ての項目で不安感が強く、上位学年になっても、その傾向は変わらないことや、一年次では入学当初から大学不適應が高く、二、三年次は8月に不安感が高くなることが明らかとなった。今後は、不安を感じる要因について精査することで、成績不良などリスクがある学生の早期抽出を行える方法を検討したいと考える。

VI. 謝 辞

本研究は、平成27年度教育推進特別研究費の助成を受け行った。本研究の遂行にあたり、ご協力いただきました帝京科学大学医療科学部理学療法学科の先生方、東京理学療法学科の先生方に深く感謝致します。

VII. 引用文献

- 1) 大城昌平：理学療法（士）教育の現状と本学の教育戦略. *リハビリテーション科学ジャーナル*, 8:1-10, 2012.
- 2) 小林哲郎：大学生がカウンセリングを求めるとき—こころのキャンパスガイド, ミネルヴァ書房, 東京, 2000, pp56-72.
- 3) 山田ゆかり：大学新生における適応感の検討. *名古屋文理大学紀要*, 6: 29-36, 2006.
- 4) 藤井義久：大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, *心理学研究*, 68(6): 441-448, 1998.
- 5) 藤井義久：*CLAS マニュアル*, 金子書房, 東京, 2013, pp1-23.
- 6) 金子千香, 平林茂, 菅沼一男, 大日向浩, 丸山仁司：理学療法学科1年生における大学生生活不安の経時的変化とその対策. *理学療法科学*, 30(5): 689-692, 2015.
- 7) 菅沼一男, 平林茂, 金子千香, 大日向浩, 芹田透, 豊田輝：理学療法学科学生における大学生生活に対する不安について—一学年間比較—. *理学療法科学*, 30(3): 475-478, 2015.